

保育学生の身体表現観

—受講前のイメージから—

馬場 悦子

A Study on Childcare Students' Views of Body Expression : From Prior Images

by

Etsuko BABA

キーワード：保育者養成教育、身体表現、イメージ

要旨

本研究は、保育者養成における身体表現教育の現状から、身体のあり方の問題と身体表現の位置づけの問題に動機を得たものである。本研究の目的は、保育学生の身体表現観について、当該科目受講前のイメージを把握し、学生の実態に応じた養成教育を行うための示唆を得ることである。方法として、短期大学保育士・幼稚園教諭課程科目「子どもと身体表現」の受講生 194 名を対象とし、受講前に、身体表現と聞いてイメージするものを問い、記述による回答を求めた。その結果、回答に含まれる語句として、「身体」などが 74.7%、「表現」などが 47.9%、「動く」などが 45.9%、「ダンス」などが 42.8%に見られ、その他に、「何を」「どのように」表すかについての回答や、様々な表現様式についての回答も見られた。これらの回答を分類し考察すると、保育学生の身体表現観の特徴として、多様性、偏向性、曖昧さ、本質的な理解の未熟さなどが明らかとなった。そして、保育者養成のための身体表現教育において考慮すべき事として、身体、表現および身体表現の本質を追究すること、表現者と他者の表現を受け止める者との両者の視点を養うことなどが示唆された。

I はじめに

「指定保育士養成施設の指定及び運営の基準について」¹⁾に定められた教科目において、従来、「基礎技能」とされていた科目名は、2010 年 7 月の改正により「保育の表現技術」

として位置づけられることとなった。その目標や内容においては、従来、音楽・造形・体育と区分されていたものが、身体表現・音楽表現・造形表現・言語表現と区分されるようになった。従来の区分は、各分野の基本的な知識や技能を習得した上で、それらに関連する保育実践に必要な知識や技能の習得へ繋げていくことが図られていた。これに対し、新しい区分は、子どもの遊びの様々な展開を念頭に、表現に関する知識や技術を習得することを意図したものである。つまり、運動遊びの活動は保育者の身体能力や運動機能などによって支えられているという考え方から、子どもの身体表現は発達や遊びや表現活動全般に関する保育者の知識・技術に依拠しているという考え方への転換といえる。

また、身体表現・音楽表現・造形表現・言語表現を、それぞれ分化された活動としては捉えておらず、様々な表現活動の結びつきによる遊びを展開するための知識や技術の習得を強調している点も、新しく示された教授内容の特徴といえる。このような考え方は、1989年改訂の幼稚園教育要領および1990年改訂の保育所保育指針において、5領域を「子どもの発達をとらえる視点として」(保育所保育指針解説書)²⁾定めた趣旨に既に見られたものである。幼稚園教育要領や保育所保育指針では、20年以上も前から領域が小学校の教科のように扱われることや特定の活動と結びつけて捉えられることを否定する考え方³⁾が示されていたにもかかわらず、これを養成教育に反映させるための根拠は、ようやく明文化されたといえる。

改正の背景には、保育者養成における身体表現教育の現状についての様々な議論がある。その一つは、保育学生や保育者の身体のあるり方の問題である。この問題については、自らの身体に対する関心や意識の希薄さが指摘されており(本山、1994)(鈴木、1996)(西、2001)、保育者の専門性として「柔らかなからだ」(西、2001)(西他、2005)⁴⁾をキーワードとして、「保育者としてふさわしい身体」(新山他、2003)が模索されている。ここで議論されている身体とは、単に肉体としての物質的な意味での身体ではなく、「他者や外界にひらかれ」「周囲の人々と響きあう」(西、2001)身体、「人との関係性から捉えられる」(新山他、2003)身体、すなわち、人格的な意味を含んだ身体である。このような議論がなされるのは、保育者養成における身体表現教育が、身体能力や運動機能を高めることに主眼が置かれ、学生自身の身体や子どもの身体に対する洞察を深めることにまで及んでいないことの証左であろう。

そして、もう一つは、保育における身体表現の位置づけとともに考えるべき養成教育における身体表現の位置づけの問題である。保育における身体表現の位置づけは、明治・大正期の「遊戯」から、保育要領の「リズム」(1948年)、幼稚園教育要領の「音楽リズム」(1956年)、そして「表現」(1989年)へと、これらの改訂とともに変遷してきた(園山他、1997)。さらに、現行の幼稚園教育要領や保育所保育指針に従えば、領域は子どもの発達を捉える視点であるため、表現の領域に限らず他の領域からも子どもの身体表現の育ちを考えていくことが求められる⁵⁾。しかし、変遷の過程には混乱が度々生じ、保育における身体表現のねらいや内容は正しく理解されてきたとはいえない。また、身体表現は、保育現場の活動の中では「無限定に用いられ」(鈴木、1996)、研究者の間でもそのとらえ方は多義的である(本山他、2001)。これらのことが、養成教育においては「分節的な学習体験」(西他、2001)となり、「子どもの表現全般についての理解や意識が欠ける」(西他、2001)という問題とも繋がりが合っていると考えられる。

以上を踏まえ、保育者養成においては、特定の表現活動に対応する教育に留まらない、子どもの表現に対する本質的な理解を促す身体表現教育が望まれる。つまり、目の前の子どもの身体表現を的確に捉えて保育を展開していける力を養うこと、そして、それを支える保育者としての身体表現観の形成が課題である。

本研究では、その端緒として、保育士・幼稚園教諭養成課程に在籍する短期大学生の身体表現観について、当該科目を受講する前のイメージを把握し、学生の実態に応じた養成教育を行うための示唆を得ることを目的とする。

II 方法

筆者が担当する「子どもと身体表現」は、純真短期大学こども学科における保育士・幼稚園教諭養成課程の必修科目であり、1 年次後期に開講される。受講者は、本科目開講までに約 20 単位の専門科目を修得し、幼稚園における 2 週間の教育実習を経験している。受講者のうち約 1 割の学生は、1 年次前期にも身体表現について取り扱う科目を選択により履修しているが、その他の学生にとって身体表現に関する科目の受講は初めてである。

本研究では、「子どもと身体表現」の受講者、2011 年度 89 名および 2012 年度 105 名の計 194 名を対象とし、第 1 回目の授業開始直後に身体表現についてのイメージを問う調査を記名式にて行った。「身体表現と聞いて何をイメージしますか」との質問に対し、記述による回答を求め、その場で回収した。回答に含まれる語句を分類し、保育学生の身体表現観について考察する。なお、2011 年度受講者と 2012 年度受講者に重複する者はいない。

III 結果

調査の結果、得られた回答は表 1、表 2 のとおりである。

表 1 身体表現と聞いてイメージするもの(2011 年度／原文ママ)

体を動かす
体を動かし、表現すること。ダンスしたり…とりあえず体を動かす
体を動かす
曲に合わせて体を動かす。ダンス
体を動かす
体を使って表現すること？ダンスとか体操とか…
体を動かして表現する
ダンスとか体操など。
身体を動かす授業
体を動かしながら運動することを楽しむ
体を使って、いろいろな物や事を表現する
体で表現して遊ぶ
体を使って表現する。ダンス
体を動かして、自分の気持ちを表現したり、音に合わせて体を動かしたりする。
身体を動かして色々な表現をする

バレエ。体を動かして表現する
無回答
音楽に合わせて体を動かすイメージ
ジェスチャー・ダンス
体をうごかす。
おどったりして、表現する
体を使って楽しんだり、表現したりする。
ダンスをしたり、ポーズをとったりして、表現すること。
体を動かして表現する。ダンスとか体操
体を使って色々なものを表現する
踊ったりしながら体を使って表現をする。
バレエとか劇とかミュージカルみたいなかんじ？
動いたり、ダンスをしたりする。
体を動かす
ダンス・ジェスチャー
体を動かす
ダンス・新体操
体で全てを表す
体で表現する。体を動かす。
体で表現する。
全身の体を使い、表現する。踊り・ダンス
リトミック
ダンスをしたり、ジェスチャーをしたり体を動かして何かを表現すること
リトミック・踊り
ダンス。体を使って表現する
ダンスを踊ったり、動物を体で表現したりすること。
体を使っていろんなことを表現する
体操・リズム遊び・リトミック
ダンス、体操、手話、ミュージカル
ダンスをしたりして体を使って表現すること
体で表現する(体そう、ダンス etc…)
体をつかう。表現する。
身体を使って何かを表現する
体を動かし表現する←喜怒哀楽 etc
身体を用いた自己の内面のアピール及びパフォーマンス
ダンス。体を動かして色んなものを表現する
体を動かして色々と表現するイメージ
体を動かす

抽象的なイメージを全身を使って表現する。
体をつかって表現する。体をうごかす。
リトミック・ダンス
いろんな音楽に合わせて踊ること
リズムや音楽に合わせて体を動かし、表現するイメージ
音楽に合わせて体を動かすイメージ
ジェスチャー
体を動かして、劇とかをする
身体を動かす。ダンス、体操
カエルの体操、踊り
ダンスやジェスチャー
踊り(ダンス)、劇
身体を動かし表現する
歌やリズムに合わせて体を動かす
音楽に合わせてリズムを取る。ダンス。バランス。
リズムに合わせて体を動かし、表現する。
ダンス等で身体を動かす。
体を使って物事を表現する。
体を動かし、表現すること。
身体全体を使って動かし、何かを表現する。
体全部を使って動く。表現する。
体を動かす。
動く
体を動かすこと(ダンスなど)
体を動かす(リトミック)
体を動かして何かをすること
体を使って(動かして)表現する。
体を動かす。楽しくおどる。
体を使って何かを表現する
身体を動かす
体を動かして表現すること
体を動かすこと(ダンスなど)。体を大きく使ったあそび。
音楽に合わせて体を動かす
身体で色々な形をつくっていくイメージです。
体で表現すること
身体を動かす。ダンス。体で表現する。

表 2 身体表現と聞いてイメージするもの(2012 年度／原文ママ)

ダンスで感情を表現する
ダンス。体を使って何かを表現
体を動かす
身体をつかって表現する
からだで表現して見せること
体で表現する
体を動かす。感情を現す。
ダンスなど体を使って色々と表現するもの
ダンス
身体を使って表現すること
ダンス
体で表現する
ダンスや体操、劇等。
体を使って表現する。ジェスチャー
身体全部を使って踊る
体育。体を動かす。
ダンスや音楽
身体を使って表現すること
動く
ダンス
体で表現する。
体を動かす
体を使っていろんなことを表現すること
音楽に合わせてたりして体を動かす
体を動かす、ダンス、運動
身体を使った表現。ダンス。
ダンス、体操
体を使って何かを表す
体で動きを表現する。ダンス・手遊び
おどり(音楽に合わせて動く)
ダンス
踊る。
運動・ダンス・何かを体で表現
体を使って感情を表現する
体を動かすこと
身体を使うこと(運動)。動きまわる。
身体を動かして自分を表現する。

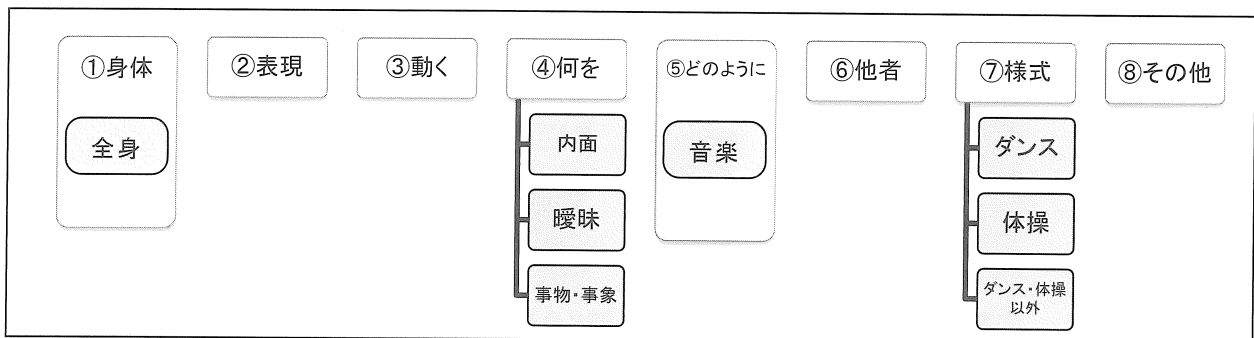
体をつかって表現する。
体を使っていろいろ表現する
身体を使って遊ぶ。体操
音楽などに合わせて身体を動かす
身体を大きく動かす。身体を動かして何かを表現することを目的としている。ストレスの発散。
身体を動かす。
ダンス
体を使ってとりあえず表現する
ダンス
体を動かして何かを表現すること。
体を使って、嬉しい・悲しい・苦しいを大きく表現すること。
ダンスとか体をうごかすこと。
体を動かす
体を動かすこと。ダンスを踊ること。
身体を使って表現する運動やダンス
ダンス・ミュージカル・おかあさんといっしょ(NHK)
ダンス・手遊び・体操
ダンス
ダンス・リズム
感情をからだで表現すること
からだを動かして何かを表現すること。ダンス・ジェスチャー
身体を動かす。
身体を使って表現する。ダンスや踊りなど。
身体を動かす
体操。音楽を体で表現したりする。
ダンス・手遊び
身体を使って何かを表現したり、動いたりすること。ダンス
体で何かを現す。体を動かす。
体を使って、動物や物などを表現すること。体を動かすこと。(ダンスなど)
身体で何かを表すもの
体を使って音楽に合わせて踊ったり何かを表現したりする
体を動かすあそび。
体を使っておどったりする。
あんぱんまんたいそう
体をうごかす。
体を動かす
喜怒哀楽を体で表現する。
ダンスとかで音楽などを体で表現

あんぱんまんたいそう
あんぱんまんたいそう
体を動かす。
シジミダンス。体を使って表現する。
ダンス
体で身近なものを表現したり踊ったり動かしたりする。
体を使って表現する。
動く。動作で何かを表す。
ダンス
体を使って表現する。
身体を使って表す。踊る。
リズムや音楽に合わせて身体を動かすこと。
ダンス・体操。音楽やピアノに合わせて体を動かすこと。
年齢に合ったダンス(シジミダンス)等
体を動かす事。ダンス・体操
体を使ってダンスをしたりする。ボール遊びをする。物を使って表現する。
身体を大きく動かすこと。何かを表現して伝える。
アンパンマン体操・しじみダンス
体を動かす。身体を使って表現する。
ダンスや演劇など体を使って何かを表現するもの
体を動かして色々なことをする
身体を自由に動かし、身体を使って楽しみ、積極的に動く
体を動かすこと
身体を自由につかって、体で動作や行動を伝える事。
体を動かして何かを伝える
リトミック・体そう・体を動かす・ダンス
劇・ダンス・体操・組体操・体育
劇・ダンス・運動・組体操
体を使って様々なことを表現すること。リラックスすること。
踊り。手遊びなど。身体全体を使い、何かを表現すること。歌や音楽に合わせて身体を動かすこと。

表1および表2で示した回答は、含まれる語句によって次の①～⑧に分類された。①は「身体」、「体」、「からだ」などの語句を含む回答で、以下、「身体」とする。そのうち「全身」、「体全部」などの語句を含む回答を、以下、「身体(全身)」とする。②は「表現」、「表現する」、「表す」などの語句を含む回答で、以下、「表現」とする。③は「動く」、「動かす」、「動作」などの語句を含む回答で、以下、「動く」とする。④は何を表現するかという表現する対象について触れた回答で、以下、「何を」とする。④の下位分類として、a.～c.の回答があった。a.は「感情」、「喜怒哀楽」、「自分の気持ち」など、内面を表す語句を含む回答（以下、「内面」）、b.は「何か」、「いろいろなこと」など、曖昧な語句を含む回答（以

下、「曖昧」)、c.は「動物」、「身近なもの」、「音楽」などの事物・事象を表す語句を含む回答(以下、「事物・事象」)であった。⑤は「大きく」、「楽しく」、「自由に」など、どのように表現するかや、どのように動くかということについて触れた回答で、以下、「どのように」とする。そのうち「音楽(音、リズム、歌、ピアノなど)に合わせて」表現するまたは動くという回答を、以下、「どのように(音楽)」とする。⑥は「見せること」、「伝えること」、「アピール」など、表現者とともにその場にいる他者の存在に目を向けた回答で、以下、「他者」とする。⑦は具体的な表現活動や表現様式を表す語句を含む回答で、以下、「様式」とする。⑦の下位分類として、d.~m.の回答があった。d.は「ダンス」や「踊る」、「踊り」など(以下、「ダンス」)、e.は「体操」や「組体操」、「新体操」、「アンパンマン体操」など(以下、「体操」)、f.は「運動」および「体育」(以下、「運動」)、g.は「ジェスチャー」、h.は「劇」、i.は「リトミック」、j.は「手遊び」、k.は「ミュージカル」、l.は「バレエ」、m.は「他」である。m.「他」には、「音楽」、「リズム」、「リズム遊び」、「手話」、「ポーズ」、「バランス」、「ボール遊び」、「おかあさんといっしょ(NHK)」の回答があった。⑧は①~⑦のいずれにも分類されない回答で、以下、「その他」とする。この中には、「遊び」、「何かをする」、「色々なことをする」、「色々な形を作っていく」、「ストレスの発散」、「リラックスすること」、「年齢に合った(ダンス)」の回答があった。図1は、以上の分類を図式化したものである。

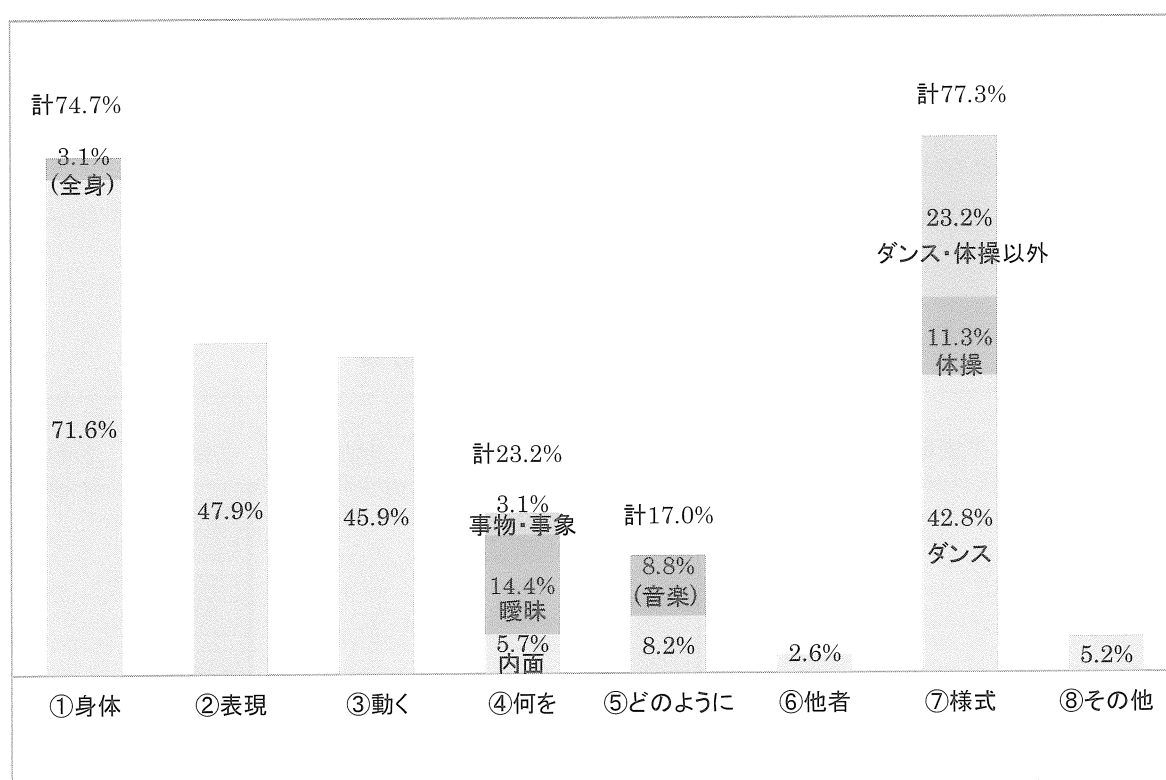
図1 含まれる語句による回答の分類



次に①~⑧の回答者数を示す。なお、各回答者が複数の語句を用いて記述するため、回答者数の合計は対象者数とは一致しない。①「身体」の回答者は、2011年度68名、2012年度77名の計145名であった。このうち「身体(全身)」は2011年度4名、2012年度2名の計6名であった。②「表現」については、2011年度44名、2012年度49名の計93名であった。③「動く」については、2011年度47名、2012年度42名の計89名であった。④「何を」については、2011年度16名、2012年度29名の計45名であった。このうち、a.「内面」は2011年度4名、2012年度7名の計11名であった。b.「曖昧」は2011年度11名、2012年度17名の計28名であった。c.「事物・事象」は2011年度1名、2012年度5名の計6名であった。⑤「どのように」については、2011年度16名、2012年度17名の計33名であった。このうち「どのように(音楽)」は2011年度10名、2012年度7名の計17名であった。⑥「他者」については、2011年度1名、2012年度4名の計5名であった。⑦「様式」については、2011年度64名、2012年度86名の計150名であった。

このうち、d.「ダンス」は 2011 年度 34 名、2012 年度 49 名の計 83 名、e.「体操」は 2011 年度 8 名、2012 年度 14 名の計 22 名、f.「運動」は 2011 年度 1 名、2012 年度 7 名の計 8 名、g.「ジェスチャー」は 2011 年度 5 名、2012 年度 2 名の計 7 名、h.「劇」は 2011 年度 3 名、2012 年度 4 名の計 7 名、i.「リトミック」は 2011 年度 5 名、2012 年度 1 名の計 6 名、j.「手遊び」は 2011 年度 0 名、2012 年度 4 名の計 4 名、k.「ミュージカル」は 2011 年度 2 名、2012 年度 1 名の計 3 名、l.「バレエ」は 2011 年度 2 名、2012 年度 0 名の計 2 名、m.「他」は 2011 年度 4 名、2012 年度 4 名の計 8 名であった。⑧「その他」については、2011 年度 4 名、2012 年度 6 名の計 10 名であった。図 2 は、以上の結果をパーセンテージで表したものである。

図 2 ①～⑧の回答をした学生(%)



IV 考察

①「身体」の回答者が 74.7%であったことは、「身体表現」の語句からも予想される結果であったといえる。その中で、極少数ではあるが「全身」に意識を向けている学生がいる。身体表現を、実技をとおして学ぶ際も、このような意識をもつこと、つまり頭の先から爪先までに注意を行き渡らせることは不可欠である。

一方、②「表現」の回答者は 47.9%であり、①と同様に「身体表現」の語句に含まれるにもかかわらず、①「身体」の回答者に比べると低い結果であった。このことから、「表現」という抽象的な行為よりも、目に見える形としての「身体」に学生の意識が向けられ易い傾向が明らかになったといえる。これにより、「表現」とは何か、その本質的な理解を深める必要性が示唆された。

また、③「動く」の回答者は 45.9%であり、「身体」を使って「動く」というイメージ

を約半数の学生が抱えていることがわかる。「身体」は「動く」ときばかりでなく、止まっているときにも表現できることは自明である。しかしながら、このことへの気づきや、静と動の対比への意識には未だ至っていないことがわかる。

④「何を」の回答者は 23.2%であり、「何を」表現するかという視点をもっている学生が一部いることがわかった。「何を」に当たる語句には多様性が見られる。「感情を」表現するや「喜怒哀楽を」表現するなど回答した 5.7%の学生は、表現の奥には表現者の内面があることに気づいている。このことは、目に見える表現をとおして目に見えにくい表現者の内面を読み取り共感していく上で欠かせない視点である。「何を」表現するかという視点はもっているものの、それが「何かを」表現するや「いろいろなものを」表現するなど漠然としたイメージに留まっている学生は 14.4%であった。その他には「動物を」表現するや「音楽を」表現するなど、保育における具体的な表現活動を想起させる回答が 3.1%あった。

⑤「どのように」の回答者は 17.0%であり、その内容は多様であった。確かに「大きく」動くことは、相手に気持ちを伝える上で意味をもつ場合もある。しかし、保育者としては、これに価値を置くだけでなく、子どもの小さな動きを見逃さないことや、細やかな表現で子どもに気づきを促すことも必要である。また、動きの強弱・大小・高低・緩急などの対比や体の細部への意識に思いを巡らせることも求められよう。「楽しく」動くことも保育者として子どもの意欲を引き出す上で大切なことではある。しかし前述の「感情を」表現するという視点から考えると、楽しく動くだけでは不十分であるといえる。また、「自由に」表現することは望ましいと考えられるが、自由に表現することが決して容易ではないということを、経験をとおして学び、自由な表現を可能にするための手立てを身につけていくことが必要であろう。また、8.8%の学生に見られた「音楽(音・リズム・歌など)に合わせて」という回答は、学生自身が好みの音楽を聴きながら踊った経験や、実習園でアニメソングに合わせて体操をしたり、振り付けをしながら童謡を歌ったりする子どもの姿に触れた経験などから想起されたものと思われる。「音楽がないとどう動いてよいかわからないが、音楽があると自由に動くことができる」と感じる学生もいるように、表現活動を行う上で、音楽の働きが有効な場合もある。また、音楽と動きはどちらもリズムを内包しており、両者の結びつきは切り離せないものである。しかし、音楽には様々な効果があると同時に、使い方によっては音楽が表現の妨げになる可能性についても考慮を要する。音楽の起源をたどってみても、音楽ありきの動きではなく身体あってこそその音楽であることを認識することも大切である。

⑥「様式」の回答者は 77.3%であり、多種の表現様式や表現活動の名称が挙げられた。この中でも「ダンス」は 42.8%と最も多くの学生の回答に見られ、次に多い「体操」が 11.3%となっている。このように、身体表現のイメージが特定の表現様式や表現活動に偏る傾向が見られた。したがって、多様な身体表現活動に触れる機会を得ることと同時に、表現に対する本質的な理解を深めることが課題といえる。また、ここに分類された回答には、小・中・高等学校の教育課程における音楽(芸術)と体育での学習内容と関連する語句が入り交じっている。このことから、学生の嗜好や得意・不得意、経験の多寡などが身体表現のイメージ形成に影響している様子が窺える。

⑦「他者」の回答者は 2.6%と極少数ではあるが、表現を受け止める「他者」の存在を意

識していることがわかった。このような視点は、保育者の表現を子どもに「見せること」や「伝えること」においても、子どもの表現を受け止めることにおいても欠かせないものである。

⑧「その他」の回答者は5.2%であり、このうち、「遊び」や「年齢に合った」といった語句からは、保育場面における子どもの身体表現を意識していることが窺える。このことは保育を学ぶ学生の回答として予想される結果といえるが、子どもの表現を豊かにするためには、まず、学生自身の表現を豊かにしていくという点を強調する必要性も示唆される。一方で「ストレスの発散」や「リラックス」という回答からは、自分自身が表現の主体であるという意識が感じ取れる。

V おわりに

1. 本研究で明らかになったこと

本研究から、保育学生の身体表現観の特徴として、多様性、偏向性、曖昧さ、本質的な理解の未熟さが明らかとなった。

そして、保育者養成のための身体表現教育において考慮すべきこととして、次のことが示唆された。第一に、身体とは何か、表現とは何か、そして身体表現とは何かという本質的な問いに継続して向き合い、考えを深めていくことである。第二に、表現する者と他者の表現を受け止める者との両者の視点を養うことである。第三に、表現がより豊かになるような手立てを知ることである。第四に、多様な身体表現活動を経験することである。第五に、各学生の貴重な気づきを他の学生と共有し合い、他の学習者の視点を知ることによって見方を広げることである。

2. 今後の課題

本研究では、記述による回答を求めたが、全ての学生が自分自身のイメージを的確に文章化できたとはいえない可能性がある。さらに、受講中、受講後と学習の過程で学生の身体表現観が変容していくことが予想される。これについては、追跡してその形成過程を明らかにしていきたい。

授業中の学生の姿を見ていると、身体で表現することが楽しくてたまらないといった表情の学生がいる一方、苦痛でたまらないといった面持ちの学生も見受けられる。表現はイメージから生まれるということを鑑みれば、学生の身体のあり方や身体表現を学ぶ姿勢は身体表現そのものに対するイメージによって生み出されているとも考えられる。そして、このイメージは、自らの表現を他者にどう受け止められてきたかという経験にも依拠していると考えられる。それぞれの経験をもつ学生にとって、それぞれの身体表現観を広げ、深め、時に変化させながら確立していくことは、個別の背景をもつ子どもの身体表現を育んでいく上で大きな財産となりうると考える。

注

- 1) 厚生労働省雇用均等・児童家庭局長通知。
- 2) 幼稚園教育要領解説においても5領域は、幼稚園教育における『ねらい』と『内容』を幼児の発達の側面からまとめられたものとされている。
- 3) 幼稚園教育要領には、「領域は、それぞれが独立した授業として展開される小学校の教科とは異なるので、領域別に教育課程を編成したり、特定の活動と結び付けて指導したりするなどの取扱いをしないようにしなければならない。」とある。また、保育所保育指針解説書には、『領域』は、小学校の教科のように独立して扱われたり、特定の活動を示すものではなく、保育を行う際に子どもの育ちをとらえる視点として示されています。」とある。
- 4) 西らは、他に「柔らかな身体性」(西他、2000)、「拓かれた身体性」(西他、2001)といった言葉をほぼ同義で用いている。
- 5) 他の領域の視点から子どもの身体表現を見ることの一例として、保育所保育指針解説書には、言葉の領域の内容である「絵本や物語などに親しみ、興味を持って聞き、想像する楽しさを味わう」ことについて、「心の中に描いたイメージを言語化したり、身体表現など様々な表現に結び付けていく機会をつくっていくことが、想像する楽しさを膨らませていきます。」とある。(傍点筆者)

引用・参考文献

- 厚生労働省(編)(2008). 保育所保育指針解説書 フレーベル館
- 文部科学省(編)(2008). 幼稚園教育要領解説 フレーベル館
- 本山益子(1994). 女子学生の身体認識——「ボディ・ムーブメント」受講生を対象に—— 日本体育学会大会号, 45, 618.
- 本山益子(1995). 女子学生の身体認識(2)——「表現」受講生を対象に—— 日本体育学会大会号, 46, 631.
- 本山益子・西洋子・鈴木裕子・吉川京子・浅井由美・平野仁美(2004). からだ・表現・かかわり——その可能性をともに育むために—— 日本保育学会大会発表論文集, 57, S10-S11.
- 本山益子・鈴木裕子・西洋子・吉川京子(2001). 保育における身体表現——保育学会における1990年以降の研究発表より—— 日本保育学会大会研究論文集, 54, 92-93.
- 新山順子・高橋敏之(2003). 保育者としてふさわしい身体を養成する身体表現の可能性とその実践 保育学研究, 41(2), 176-183.
- 西洋子(2001). 保育者と身体性(特集 保育者の専門性と保育者養成) 保育学研究, 39(1), 12-19.
- 西洋子・野口晴子(2005). 保育者としての身体的感性を育てる教育——授業での身体表現の体験による“共振”の形成とその段階の変化—— 保育学研究(日本保育学会), 43(2), 42-51.
- 西洋子・吉川京子・鈴木裕子・本山益子(2000). 保育者と身体性Ⅰ——身体表現の題材選択にみる特性と問題点—— 日本保育学会大会研究論文集, 53, 298-299.
- 西洋子・吉川京子・鈴木裕子・本山益子(2001). 保育者と身体性Ⅱ——身体表現授業前後の学生の変化から—— 日本保育学会大会研究論文集, 54, 90-91.
- 西本美節(1991). 幼稚園教育要領・保育所保育指針の改訂と保育の源流——世界と日本の幼児保育年表—— 甲子園短期大学紀要, 10, 41-60.
- 園山順子・山口茂嘉(1997). 幼稚園教育要領における身体表現の取り扱いの変遷に関する一考察 日本保育学会大会研究論文集, 50, 908-909.
- 鈴木裕子(1996). 身体表現における即興の有効性(Ⅰ)——保育科学生の即興能力の視点から—— 日本保育学会大会研究論文集, 49, 428-429.